

法眼

第2号 1998年5月

「法友」

北アメリカ開教総監
秋葉玄吾

中国に禅仏教が広がりはじめた頃を「純禅の時代」と呼んでいます。中国・唐の時代、九世紀の頃のことです。舞台は、揚子江中流の南北にひろがる、起伏の多い豊かな緑の大地です。宗派はまだ存在していません。公案と坐禅の分裂もなかった。禅者は道を求めて自由に行脚し、問答をした。人間の内なる根源的な宗教性を探り、自分の禅を生きる、大らかな禅者が、あちこちの山に棲み、原始の禅を実践していました。

初祖菩提ダルマより六祖慧能の四・五代後までの禅者の自由活潑な、生命力あふれる禅仏教の時代です。

「祖堂集」という禅の語録があります。南朝鮮の山奥に潜んでいたこの「祖堂集」は第二次大戦後発見され、長い眠より目醒め、人々の前にその全貌をみせました。「純禅の時代」の力強い求道のエピソードがたくさん載っています。「純禅の時代」処女資料といわれています。

禅仏教学の泰斗である、柳田聖山博士が長年この語録を研究し、今日、現代日本文で私達も読めるような「祖堂集ものがたり」を編んでくれました。

その本には、曹洞宗の源流となる石頭希遷、薬山惟儼、雲巖曇晟、洞山良价など、山に棲んだ禅者の話題がいきいきと描かれています。私達は、曹洞宗の意識が生れる以前の、原始曹洞の息吹きに触れることが出来ます。「祖堂集ものがたり」は青原、石頭系の珍しい記述が載っていて、古典曹洞宗形成の事情について、豊かに伝えてくれます。

この本の中に、曹洞宗の祖と言われる洞山良价の師匠である雲巖曇晟と、その肉親の兄であった道悟円智のエピソードがあります。柳田博士の描くこの二人のエピソードを紹介したいと思います。

道吾和尚は四十六才の時始めて出家した。雲巖和尚はじつは道吾の弟であった。雲巖が先に出家し、百丈和尚（黄檗、臨済の祖師）のもとで侍者をつとめること、すでに二十年であった。道吾はそのころまだ俗世にあり、地方の役人であった。二人はある日偶然旅館で出逢った。出家をした弟の身を心配した母が、失明して亡くなったという兄（道吾）からの報せを聞いた弟・雲巖は、ただちに兄道吾を出家させる。そ

のいきさつの描写の後、二人の会話がある。

百丈山で弟・雲巖の弟弟子になった兄道吾は礼拝をして訊ねた。

「私は、ひとつの問題をもっています。師兄（雲巖）にたずねたいと思っていましたが、今までその機会がありませんでした。今日は幸い師兄におたずねしたいのですが、よろしいでしょうか。」

「どうゆう質問があるのですか」

「わたしたちがこの肉体を捨ててしまったとき、師兄とどこで出会うことができますでしょうか」

「生れもせねば、滅しもせぬところで、出会うのです。」

「草むらの中に人がいないと思ってはいけません。ちゃんと鑑定者がいますよ。」

「何とまあ君は、頭のあたりに、役人の冠のあとが残っているため、そういう言い方をするんだ」

「師兄に申し上げます。どうか、そうした言い方をなさらないで下さい。仏法は、僧俗にかかわらないはずです。」

雲巖は、そこでたずねる。

「そういうことなら、では、正しい方が兄弟子になることにしよう。それでは師弟のあなたは、どう答えますか」

「わたしは、生れもせねば滅しもせぬところでさえ、互いに出会うことを期待しません。」後になって、雲巖は言った。「じつにはっきりしたものだ。外ならぬ道吾のすぐれた見識は、そんな微細なところまで、すでに手に入れていたのだな」

のちに、道吾と雲巖は、やがてともに百丈禅師の下を去り、薬山禅師のすぐれた後継者になる。右のような二人の出家のものがたりは、非常に印象的です。弟の方が二十年も先に出家し、未だ悟らないでいるのに、四十六才で役人生活をやめ、にわかにな出家した、道心の固い兄の方が、薬山禅師の下で先に大悟し、それからはひたすらに、弟の開悟を助けようとつとめます。

兄と弟の関係は、あくまで世俗のことです。出家をすれば、一日でも早く剃髪したものが師兄とよばれる。しかも師兄はまだ悟れず、後れて出家した師弟は、実の弟である雲巖を激励し、協力を惜しまない。兄弟愛のものがたりが描かれています。

いずれにしても道吾と雲巖は、ともに百丈山を去り、薬山を訪ねます。その間のいきさつを、「祖堂集ものがたり」を引用し、みてみましょう。

二人は百丈禪師のもとでたがいに助けあって修行をしていた。ところが一年を過ぎたのち、道吾は百丈禪師のもとを辞し、薬山禪師のもとへ去った。薬山がたずねた。

「究極の一句を、君はどのように表現するか」

「ある一人の男（釈迦牟尼ブツダを指す）は、全く表現していません。」

「ブツダのたくさんのお経は、いったいどこから出て来たのか」

「わきにもれたのでしょうか」

薬山は、大へんこの答えが気に入った。道吾は薬山禪師の禪を学び、その滋味を得たのち、ただひたすら雲巖のやって来ることを待ち望んだ。そして、ある日、手紙を書き送った。

「石頭は金をあきなう黄金商だが、江西（馬祖系）は雑貨屋だ。雲巖はそちらで脚ぶみなどしていて、どうする気だ。まったく残念だ。一日も速く、こちらに来なさい」

雲巖は、この手紙を手にしてから、言い知れぬ愁いに沈むばかりでした。ある日、百丈和尚のそばで、立ったまま、夜中になっても動かなかった。百丈は言った。

「夜も遅い、休みなさい。」

雲巖が立ち去らないので、百丈和尚はさらに、言われる。「君にはどんな事情があるのだ。顔色も大へん悪いし、何が腹の中に人に言えぬわけでもあるようだな、あるなら、言ってみることだ」

「何事もございません。」

「道吾和尚から、手紙をもらったのじゃあるまいね」

「実は、ハイ。」

百丈は、道吾の手紙を求めた。雲巖はすぐに取り出して、和尚に差し出す。百丈はそれを読み終って言う。

「まったくそうだ、くわたくしを生んでくれたのは父母だが、私を本当に知ってくれるのはあなただ」と言うではないか。君はもう、私のところに居る要はない。すぐ立ち去ることだ。」

「行く気になれません。」

「わたしはかねて、薬山に手紙を出そうと思っていたところだ、また贈り物もある、それを薬山和尚のところにとどけたいのだ。君は私の手紙をもって、早く行くのだ。」

雲巖は師の言いつけにより、手紙をもって薬山にやってきた。道吾が出迎えて、薬山和尚のところに案内する。手紙を渡してすべてのあいさつが済んだ後、薬山がたずねた。

「百丈和尚は平生、どんな説法をしているか」

「先生はく三句を超えたところを見きわめよ」とか、またく六句を超えたところを知れ」と、説いています。」

「遠くへだたって、何の関係もなしにいられるのは、とにかく有難いことだ」

さらに薬山はまた聞く。

「その外に、どんなことを教えているのか」

「あるとき説法が終って、学生たちが法堂を出ようとしたとき、先生が学生たちをよびとめました。学生たちがふりかえると、先生は言いました。〈どうした！〉」

「なぜ早くそれを言わないのだ、百丈和尚はやはりボケとらん、君のおかげで、百丈の近況を知ることが出来たぞ。」

また薬山は雲巖にたずねた。

「目の前にせまっている生死を、君はどうしているのか」

「わたしの目の前には生死などございませぬ」

「二十年も百丈のところにて、いまだに娑婆気がぬけておらん」

「わたしはその通りなのですが、先生はどうなされております」

「よろよろ、とぼとぼ、お恥かしい限りを尽して、とにかくその日ぐらしをしているだけだ」と薬山は答えた。

こうして二人の兄弟は、互いにいたわりあって薬山禪師のもとで修行にはげむことになりました。

古典曹洞宗の源流となる道吾と雲巖の興味深いものがたりは、さらにつづきますが、紙幅に制限があり、次回に紹介させていただくことにし、中途ですが今回はここまでにします。

さて、今回は百丈が雲巖に語った、「わたしを生んでくれたのは父母だが私を本当に知ってくれるのはあなただ」という言葉について考えてみたいと思います。

さいわいに道吾と雲巖は実際の兄弟であった。はじめ、弟（雲巖）が先に出家して法兄とよばれ、兄（道吾）が後れて法弟とよばれた。やがて法弟（道吾）が先に悟って、法兄（雲巖）の修行を助ける。たしかにかれら兄弟を生んだのは父母であったが、かれらをしてかれらたらしめたのは、外ならぬかれら自身であった。悟りを得ることは、師の指導によるよりも、同じ道を学ぶ友人相互のたすけあいによることのほうが多い。「たすけあい」とは、相手のためと思って力を貸し、結局は相手が自分で仕上げる以外に、どうしてやりようもない。そのぎりぎりのところまでの配慮を意味します。

仏教では、知己のことを善知識といいます。「六祖壇経」などで、師が聴衆に向って善知識と呼びかけているのは、道の友よ、同志よ、という親しみを表わしています。古い禪の語録には、善知識よ、道の友よといった言葉が多い。師と弟子とは、もともとともっとも深い友人であり、共に道を学ぶ仲間である。道の仲間は、また兄弟でもあります。ヨーロッパの宗教においても、人はみな兄弟と言っています。

ともあれ、道吾和尚と雲巖和尚は、ともに道の仲間として、互いにはげましあい、いつくしみ合って、すぐれた後継者を作り出しました。「私を成就させてくれるのは友だ」

という、広い意味での仲間意識が、どれほど真剣なものであったかを、「祖堂集」は、千年後の私達におしえてくれます。

現代の私達は、アメリカの禅、日本の禅などと区別を立てず、道吾和尚と雲巖和尚のように、互いに助け合って、尊重し合い、はげまし合い、立派な後継者を育てあげていきたいものと、私は願っています。



曹洞宗日課勤行聖典翻訳事業

天真・アンダーソン
グリーン・ガルチ・ファーム禅センター

1967年に、私が禅を修行しようとしてサンフランシスコに来た時、手に入れることのできる、曹洞禅についての英語の本は、1913年に出版された“The Religion of the Samurai (さむらいの宗教)”と「正法眼蔵随聞記」の英語訳のみというありさまでした。この三十年の間に、曹洞禅についての国際的な関心は、仏教修行者、学者、そして一般人の間に急速に広がり、曹洞禅のテキストの英訳も、劇的に増加しました。

しかしながら、それらの教へに近づくことは、現存する英訳の質が不十分であることによって妨げられてきました。現在、私共の偉大な祖師である、道元禅師、瑩山禅師の基本的な著作の英語訳はあるにはありますが、それらの多くは、厳密な翻訳というよりも、パラフレーズであり、テキストの十分な理解に必要な細かな注がほどこされているものはほとんどありません。それで、(曹洞系の禅センターでも、大学の教室でも) 英訳テキストを使用する人達にとって曹洞禅の根源的な教へについて適切な、そして豊かな理解を獲得することははなはだ難しいのです。

それらの教へについての国際的な理解の継続的な進展には文献学的な研究と原テキストの言語への細かな注意に基いた、権威ある、学問的な翻訳が必要であります。(その上、それら指導者は、日本語での進退作法のテキストを利用することはできません。) そして、大多数のアメリカでの曹洞禅グループは現在、英訳された、曹洞系の勤行聖典を学び、唱えているけれども、夫々、別々の英語訳を使用していることが多いのです。

多くの僧侶や学者は、現在、更なるアメリカでの曹洞禅の発展のために、行持の進退の手引き書の翻訳と、権威ある英訳勤行聖典が不可欠であることに、同意しています。

指導者、修行者そして学者達に最善の資料を提供するために、曹洞禅の重要なテキストの正確で、畏敬の念を起こさせる英訳を作るための包括的な翻訳計画が進められています。

これらの翻訳作業は、曹洞宗宗務庁教化部国際課と、アメリカの曹洞禅の指導者と、日本人曹洞禅の学者と協議をしながら、禅学専攻の学者のチームによって行われています。この翻訳は、最新の研究に基いて、最高度の学術的水準を保ち、そして、言語典拠、テキストの概念についての完全な注解を含むものであることが望まれています。

でき上がった翻訳の成果は、電子的なもの、書籍の形との両方で作成され、高度さを保つため、そして国際的な広範囲な販路を保つために大手の学術的な出版社との協力によって出版される予定です。また、アメリカの曹洞禅の指導者や修行者に適当な進退作法についての資料を提供するために、このプロジェクトは、「曹洞禅行持規範」も翻訳出版します。そして、それに合わせて、アメリカの曹洞禅の指導者と協力して、権威ある勤行聖典の英訳を行います。

このプロジェクトの全体は曹洞宗宗務庁国際課の経済的な支援によって行われます。

全ての翻訳を点検し、承認するために、編集委員会が結成されました。委員会のメンバーは、スタンフォード大学教授カール・ピュルフェルト氏、サラ・ローレンス大学教授グリフィス・フォーク氏、駒沢大学の奈良康明、松本文隆両教授、エール大学教授スタンリー・ワインスタイン氏、禅ピースメーカー、禅コミュニティ・オブ・ニューヨークの徹玄・グラスマン師、花園大学国際禅学研究所のウルス・アップ氏、北アメリカ開教センターの奥村正博師、そして、私自身と、国際課員2名です。

ピュルフェルト教授とフォーク教授がメインの翻訳者であり、このプロジェクトの編集長であります。

編集委員会のメンバーとして、私は、包括的なプロジェクトの中で勤行聖典の部分の翻訳をオーガナイズするように非公式に要請されました。

私は特に、勤行聖典の英訳を助けることに興味がありました。というのは、上にも述べたように、多数の北アメリカの曹洞系禅センターでは同じ、基本的な勤行聖典を学び、唱えているにもかかわらず、しばしば、別々の英訳を使っているからです。

私は、もし、様々なセンターの指導者が一堂に会して、原テキストを学び、それらの翻訳について同意に達することができれば、我々の全ての禅センターに於ける曹洞禅の修行の調和とパイタリティとに貢献するだろうと感じました。

そして、また、もしその翻訳が十分によいものであれば、我々の全員がその翻訳を使いたいと思うかもしれないと感じました。そして、もし、我々が我々自身で作成した同じテキストを使うようになれば、全ての修行者間のコミュニケーションと連帯感を増進するでしょう。

この目的のために、カリフォルニア州北部のマリン郡に

ある、グリーン・ガルチ・ファーム蒼竜寺において、翻訳コンファレンスを3回開催しました。夫々のコンファレンスはおおよそ、3日間でした。曹洞宗の日課勤行聖典を使用している主な禅センターのシニア・ティーチャーと、指導的な禅学者及び翻訳家を招きました。

招かれた人々の多くが、多忙なスケジュールの中でコンファレンス出席のための時間を作ってくれました。(何人かは、遠方から来られたのです。)

私は、深く、参加者達の熱心さにうたれ、彼らの翻訳の

質に対する関心の深さに感銘しました。

指導者も、学者も、我々の祖師方の教えを表現するのに使用する言葉について強い感受性と意見を表明しました。しかし、同時に、彼らはお互いの貢献に対して、真摯な評価を披歴されました。最後に、参加者達は、その仕事の質に満足しているようでありました。

新しい翻訳は、その深い意味を失うことなしに、原テキストの意図をより鮮明に映しているといえると思います。これらの集会に参加した、指導者、学者は以下の通りです。

秋葉玄吾師、	好人庵、オークランド
ショーサン・オースティン師、	サンフランシスコ・禅センター
大円・ベナージュ師、	平等山禅堂、マンシー、ペンシルベニア
カール・ビュルフェルト教授、	スタンフォード大学
キョーゲン・カールソン師、	ダルマレイン・禅センター、ポートランド、オレゴン
能忍・コワニイ師、	ネブラスカ禅センター
テンケイ・コッペン師、	観世音禅センター、ソルトレイク・シティ
ジコー・カツ師、	グリーン・ガルチ・ファーム・禅センター
メイアン・エルバート師、	シャスタ・アベイ、マウント・シャスタ
ゾークツ・フィッシャー師、	サンフランシスコ禅センター
天心・フレッチャー、	禅マウンテン・センター、ロスアンゼルス
グリフィス・フォーク教授、	サラ・ローレンス大学、アン・アーバー
ゼンケイ・ハートマン師、	サンフランシスコ禅センター
太源・ダン・レイトン師、	グリーン・ガルチ禅センター
奥村正博師、	北アメリカ開教センター、ロスアンゼルス
ダイズイ・マクファラミイ、	シャスタ・アベイ、マウント・シャスタ
ティー・ストローザー師、	サンフランシスコ禅センター
碩順・スナ師、	ミネソタ禅センター
棚橋一見先生、	パークレイ
メイドー・タトル師、	シャスタ・アベイ、マウント・シャスタ
慈照ワーナー師、	ストーン・クリーク禅堂、セバストポル
宗純・ウェイスマン師、	サンフランシスコ&パークレイ禅センター
大龍・ウェンガー師、	サンフランシスコ禅センター

この三回のコンファレンスで、以下の聖典の新しいコンセンサス英訳を作成しました：般若心経、普勸坐禅儀、宝鏡三昧、参同契。

以下の偈頌の訳も作成しました：搭袈裟偈、三帰礼文、四弘誓願、普回向、開教偈、讖悔文、行鉢念誦、舍利礼文、入浴之偈。

ドラニは、サンスクリットの原文の、シノージャパニーズ（中国語に強い影響をうけた日本語）音写を残すことに決めました。

日課勤行聖典については基本的な翻訳作業を完了しました。これから、なすべきことは、深い学習と指導のための教材として使えるような注釈付きの翻訳版を作ることである。

当初、私は、高品質な翻訳を作り、アメリカの全ての曹洞系禅センターで採用されるようになればと願っておりました。

しかし、習慣性を考慮に入れると、つまり、個人やグループの中での慣れ親しんできたものへの執着と変化への抵抗を考えると、このことは、すぐには起こらないだろうと思います。

全体として、夫々のグループが今まで使ってきた数々の翻訳に、より詩的で、インスピレーションを与える部分があったとしても、新しい訳は、今迄のものよりも、いい訳だと言えると私は思います。

この翻訳の運命がどうあれ、私は、我々は、テキストについての、時にはかなり深くまでほり下げた、学習と議論において、多くのことを学んだと思います。我々全員が愛している教へについて、共同作業をした結果として、全て参加者の間でお互いに対する尊敬と理解を新たにすると信じます。

禪と太鼓

モンテペロー曹禅寺
倉井秀一

私が子供の時、父の倉井秀雄が盆踊りの太鼓をたたいているのを見ました。太鼓の響きと共に心全体が鼓動しているのを感じました。それが、私をこの古楽器に導き入れる機会となり、自分が僧侶になりたいと気づく前、私は太鼓奏者になりたいと思っていました。

仏教で太鼓の響きは、法を聞くため、私達を導いてくれる仏の声を表し、叢林では読経に合わせてたたいたり、時を知らせるのに使われています。さらに、日本文明の発祥に結びつけることもできます。

神道の神話によると、天照大神（太陽神）は、弟が彼女を怒らせた為、洞窟に隠れてしまい、全世界が暗闇に包まれてしまいました。そこで、ウズメという神様が、踊りと太鼓で誘い出すことにしました。いったいこの音は何だろうと天照が出てきて見ると皆が楽しそうに踊っているではありませんか、皆が喜んでいるのを見て、天照が踊り始めると、再び太陽が照り、世界が明るくなったと言うことです。

太鼓は、日本の村を造り出すのに重要な働きをしていました。遠く離れた村の外れでも太鼓の音を聞くことができ、村人に差し迫った火事や洪水、津波など災害の危険を知らせる為、村の真ん中に太鼓を据えた高い檜が設けられていました。農民は害虫を追い払う時や収穫を祝う時にも太鼓を使っていました。

人間として一番最初に聞く音は、おなかの中で聞く母親の心臓の鼓動だそうです。ですから、赤ちゃんは大太鼓の音にあやされて寝る事を知っているのです。私達の心臓の鼓動は生命そのもののリズムなのです。坐禅をしている時の呼吸の様に無意識に自然のリズムに従うのです。

私達の気分や感覚は、日常生活のリズムによって左右されます。時にはビートに乗って時には逆らって。太鼓を演奏したり聞いたりする事は、坐禅をするのと本当に良くにしています。心と体が一つになったり、そうでなかったり。太鼓の音と一つになる事は身心一如です。自分と音がかかされていない、自分が音で音が自分。世界的に有名な太鼓グループ、Kodoのメンバーの一人が言っています。「私が演奏している時、自己の完全な満足を感じる事がほんの一瞬ある、しかし、自己を忘れ太鼓の音と一つになった時、全てから解放され、邪魔されない完全な自由を感じる」

私はまた太鼓の音のない音です。丁度、絵を描く時、何もない空間が対象に形を与えるように、音の不在が音に形と十全さを与えます。お盆の太鼓の演奏者は踊りのリズム

に合わせて一打づつたたいているわけではありませんが、音楽と踊りを引き立て補足しています。踊っている人には程よくたたいている太鼓の音は聞こえませんが、たたくのを完全に止めた時それには気づくのです。

私が、カリフォルニア州ウエストコビナのイースト・サンガブリエル・バレー・ジャパニーズ・コミュニティ・センターで指導している「帰心」と言う太鼓グループがあります。ヒンズー教で「KISHIN」とは、生死輪廻から解脱して、永遠に神自身に帰ることを促す神クリシュナのニックネームです。これは、夫々の源に帰するとも言えます。

1970年代、私が太鼓の演奏を始めた時、日系アメリカ人3世の人達は、彼らのアイデンティティを探していました。日本の文化・言語・芸術そして宗教は日系アメリカ人1世によってアメリカに持ち込まれましたが、第2次世界大戦中、日系アメリカ人が収容所に入れられた時、多くの文化活動が禁止されました。太鼓は、ひとつの芸能として近づきやすく、多くの3世は、太鼓を一つの文化遺産として受け入れたのです。

現在私は、色々なバックグラウンドの7才から75才までの約200名に太鼓を指導しております。生徒たちが太鼓の練習をする理由は、エクササイズ、文化芸能に参加したい、精神修養、純粋に楽しむ為など色々ありますが、一般的な理由の一つに、太鼓と一つになるのを感じる、太鼓の音と一つになれる。と言うことがあります。

太鼓を上手にたたくと言うことは、観衆から注目を浴び称賛されるように演奏すると言う意味ではありません。最終の目的は、自己と太鼓の一如を達成する事にあります。自己と太鼓の間を結ぶものはバチです。坐禅のように自己を忘れ、自我から解放される事です。太鼓をたたく為に必要な力と活力は筋肉から来るのではなく、腹から来るのです。武道において、腹は気あるいはエネルギーがためられている場所とされています。そこから太鼓をたたくエネルギーやスピリットが出てくるのです。さらに、エネルギーの意味は、気または心 (heart/mind)、精神、魂と言うことです。ですから、気に焦点をあて、正しい呼吸の訓練をするのは、太鼓をたたく時の基本なのです。

私達が気を通して太鼓をたたく時、そのエネルギーと精神を観衆や聞いている人に伝えています。聞いている人が答える時、その人は奏者に伝え返してきます。このように、それら奏者と聴衆の間に行き来する、たえまのないコミュニケーションがあります。

指導者として、私は絶えず生徒たちから学んでいます。私は自分のお寺以外で二つの仏教徒組織で太鼓を教えています。その一つは、ツーチーファンデーション、台湾系浄土宗の在家組織でチャン・エン師を指導者としています。もう一つは、金輪聖寺、中国禅宗系の組織で故チャン・ファ

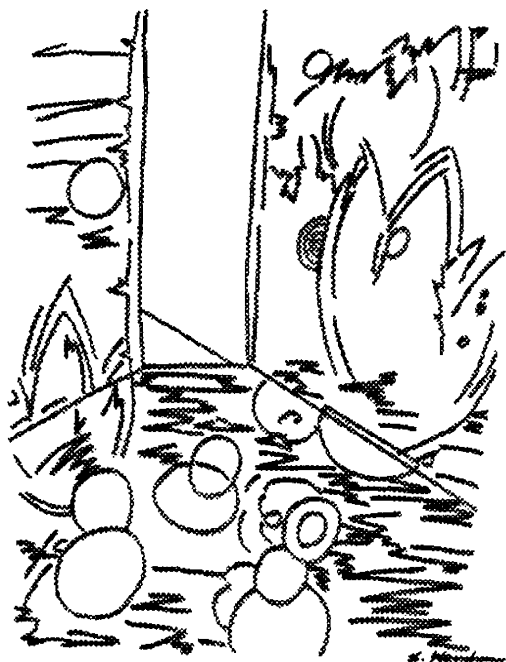
一師の創立です。

ツーチーファンデーションの生徒たちは、非常に活発な男女のグループで、恵まれない国での際立った援助や、骨髄の寄付を集めたり、無料クリニックを建てるなど、世界中でボランティア活動をしています。彼らの集団の総合的な精神は、演奏しているとき、太鼓を通して伝えられています。なぜなら、彼らの信仰が大変力強いからです。

10才から21才までの20名の修行僧が、金輪聖寺で太鼓の練習をしています。彼らは、禅の修行をする為世界中からやって来たのです。堂頭のハン・チャン師は、若い修行僧達に、夫々の靈性をつちかうような音楽活動の機会を与えたかったのです。その修行僧達が太鼓をたたく時、彼らの心の集中からでる、はちぎれる程の生のエネルギーを感じます。

私は、太鼓がストレスや緊張を和らげる治療法になることを探し当てました。大きな航空宇宙開発会社TRWの太鼓クラスでは、従業員の人達が1日の仕事でたまったストレスを発散する為にやって来ます。太鼓は、音楽療法の一つの形として指導できることに、サン・バルナディーノにあるパットン州立病院で患者さんたちに太鼓を教えている時に気づきました。太鼓の練習の前に、心を落ち着かせる為10分程坐禅をし、それから身体を落ち着かせる為太鼓をたたいたのです。ある患者さんはタバコを止め、太鼓に対する信頼を得ました。

太鼓を始めてから20年、今でも、太鼓を通じた経験から、私は学び成長しています。透明で純粋な心と身体と精神を持たなければ、太鼓から透明で純粋な音は創造できないと言う事を私は学びました。この人生を生きることができ、私達の毎日の生活のリズムを聞き、触れそして感じる事ができると言う幸運は、本当に感謝するに値することです。



青山俊董老師北アメリカ巡回布教

平等山禅堂堂頭
ベナージュ・大円

1995年8月、イタリアのアシジに於ける青山老師の御講演の通訳を勤めさせて頂く為、老師と侍者の笹川悦導師に随行しました。すべての勤めを終え、私達を乗せたバンは夫々が帰りの飛行機に乗る為、ミラノへ向け、イタリアン・アルプスに掛かった二つの虹に沿って疾走していました。青山老師にもう一度アメリカにお出で頂けるようお願いする好機でした。今回は、平等山禅堂の活動がどのように進展しているか見て頂く為です。

1984年、青山老師は前角老師のお招きにより、摂心中のロサンゼルス禅センターやミネソタ禅メディテーションセンター、禅コミュニティオブニューヨーク、禅マウンテンモナストリー、サンフランシスコ禅センターそしてグリーンガルチファームに拝登されました。私も通訳として随行させて頂きました。ミネアポリスに向けてロサンゼルスを出発するにあたり、前角老師は私達の為に片桐老師に電話をかけて下さいました。その最初の言葉が「初めまして」。私は信じられませんでした。それが本当に前角老師と片桐老師の初めての出会いだったとは考えられません。15年前のアメリカにおいて、それぞれの禅センターが相対的孤立状態に在った事を表しています。現状とは大きく異なります。

日本における多年の禅修行の後、アメリカにおける私の精進は、正しい方向に向いているのかどうか、また、青山老師の将来に対する提言は何か、確かめて見たいと思っておりました。同様に、曹洞禅修行の活力(バイタリティー)を老師にお見せしたいと願っておりました。特に、日本とは大きく異なる文化における女性の貢献の仕方を見て頂くことを期待していました。この夢が最終的に2年と少し後に実現したのです。

老師と侍者の笹川悦導師は、ロサンゼルスに到着後、北アメリカ開教総監部・開教センター・両大本山別院禅宗寺そして、現在ウエンディー・慧玉師が指導しておられるロサンゼルス禅センターに拝登し、平等山禅堂を初め、その他の講演先を巡回する為、北アメリカ開教センター書記の横山泰賢師と合流されました。老師を拝請してから実際にアメリカにお出で頂くまでの間に、平等山禅堂があるアパートが売られてしまいました。新しい地主さんのもと、当面は活動を続けさせて頂けることがわかりましたが、老師から将来に対する幾つかの助言を頂くことを望んでいました。青山老師の3日間の滞在中、平等山禅堂で現在活動中

の参禅者皆が顔を合わせる好機となりました。青山老師が「十牛図」のお話をされた2日間、参禅者は禅堂を隔々までうずめました。応量器を使って皆が食事をする時は、英語で食事の偈文を唱えました。さらに、クエーカー教の歴史的な建物ペンステール・クエーカー・ミーティング・ハウスは、坐禅の経験のない地元の人達への講演会場として使わせ頂く事を親切にも承諾して下さい、老師はお疲れにもかかわらず「いかに生きべきか」と題して夜話をして下さいました。ペンシルバニア州のルイスバーグ近郊にあるバックネール大学の教会で、参禅会をしている生徒達も老師のお話を聞き、自由な質疑応答が行われました。どこの会場でも質問は全て丁寧に記録されました。

青山老師の慰問を長い間待っていた、ルイスバーグ連邦刑務所（重刑者収容）の参禅会は、刑務所が閉鎖状態（刑務所内で殺人があった為）であった為、訪れることができませんでした。このゲイトレス・ゲイト・サンガは5年間参禅会を続けており、既に3名が授戒しております。

次の日私達は、マサチューセッツ州ノーサンプトンにある、スミス女子大学に到着致しました。スミス大学の学生さん達は、青山老師の御著書「美しき人に」の英訳版「ゼン・シーズ」を海野大徹教授が授業で使われていた為、老師のことを既に知っていました。浄土真宗の著名な学者であられる海野大徹教授は、来年退職されるそうです。

林のなかを快適にドライブしてバレー禅堂を拝登致しました。持ち寄りパーティーの昼食後、参禅者から出された多くの質問は、藤田一照師（バレー禅堂堂頭）の助けをかりて通訳されました。ボストンのピーン・タウン禅堂では、池田永晋師が迎えて下さいました。ハーバード大学の博士候補者で曹洞宗の僧侶でもあるダンカン・ウイリアムス師にピーン・タウン禅堂と翌日のハーバード大学で、解説も含め色々とお助け頂き、大変お世話になりました。サンフランシスコに到着した私達は、サンフランシスコ禅センターの女性指導者達と夕食を共にしました。サンフランシスコ禅センター堂頭ランチ全慶ハートマン師、バーバラ春水コーン師、ピッキー・オースティン師、風流シュローダー師そしてティア舞雷ストローザー師が参加され、リンダ慈光カツ師は参加できませんでしたが、東西において、女性が求めているものは何か、と言う視点から曹洞禅修行を見る好機となりました。

グリーン・ガルチ・ファームでは、女性老師から何が得られるかと、禅堂を埋めつくした人達に歓迎されました。そして講演後、お茶会がお茶室で行われ、秋葉玄吾開教総監やグリーン・ガルチ・ファーム堂頭ノーマン・象傑・フッシャー師など、他の曹洞宗指導者と御一緒させて頂ける好機となりました。

青山老師と笹川師に広大な景観を楽しんでもらおうと、ストーン・クリーク禅堂の慈照キャリー・ワーナーさんの

案内で、最終目的地タサハラ・マウンテン禅センターへ向かい青山老師のお話と質疑応答がヤート（モンゴル風の大きなテント）で行われました。その夜、サンフランシスコに戻り、桑港寺で巡回布教最後のお話をして頂き、開教師の南原一貴師を初め、メンバーの皆さんと楽しい一時を過ごしました。

青山老師に再度来米して頂き、老師の仏智慧を平等山禅堂や他の曹洞宗系禅センターの皆さんと共に学びましたことに感謝致します。青山老師には、アメリカ禅のバイタリティー（活力）を持ち帰って頂ければと願っております。

1997年度北アメリカ巡回布教を可能にする為に御尽力頂きました、宗務庁国際課並びにSOTO禅インターナショナルの皆様にご心から感謝致し、御礼申し上げます。

編者



青山俊董老師北アメリカ巡回布教 (ロサンゼルス報告と感想)

北アメリカ開教センター
横山 泰賢

北アメリカ開教センターでは、1997年10月15日から30日までの2週間、愛知専門尼僧堂堂頭青山俊董老師をお招きして、6都市にわたる大学や曹洞宗系寺院、禅センターで巡回布教を実施致しました。その主な報告はベナージュ・大円師よりなされておりますので、ここではロサンゼルス報告のみさせていただきます。

10月15日午前11時15分日本航空62便でロサンゼルス国際空港に到着された青山俊董老師と侍者の笹川悦導師は、両大本山別院禅宗寺・開教総監部・開教センターに拝登されました。

翌16日、ロサンゼルス禅センター仏真寺にて茶話会を行い、青山老師がお土産に持ってこられた2種類のお菓子と、笹川悦導師に立てて頂いた抹茶を頂戴しながら、老師は道元禪師の詩「本来の面目」と「圓相」のお話をされました。老師がお持ちになったお菓子の一つは、包みに老師の筆による圓相が書いてあり、もう一つは、花月鳥雪をかたどったお干菓子でした。他では味わえない茶話会を一同楽しませて頂きました。

その夜、ロサンゼルス・ニューオータニ・ホテルで茶道・華道など当地で日本文化を教授されておられる先生方を対象にした、講演会が催されました。松本宗静先生のお茶会で始まったこの講演会で老師は、茶道の例を出しながら修行の意味や無常についてお話されました。参加者はお話を聞きながら時には涙し、時には笑い、味わい深いお話に、皆さん大変感謝しておられました。

10月17日午前10時USエア-2便にて、青山老師をはじめ笹川師と私は、次の巡回地ペンシルバニアへ向かいました。

この度の巡回布教の、各地での反響は大きく、開教センターに「老師のお話を本にしたい」或いは「本として出版されるのか」と言う問い合わせが何件も有りました。又、質疑応答では、純粹で鋭い質問が数多く出され、アメリカの現状を良く表しておりますので、その一部をご紹介します。

- 1、日本には、仏教の伝統と文化が有り、良寛様の様に托鉢により法身を支え弁道修行もできますが、アメリカにはそのような文化はなく、多くの僧侶が別に仕事を持たざるを得ません。このような状況の中どのようにして無常の真実を明めればよろしいのでしょうか？

- 2、今世紀におけるアメリカの自由は、苦しみと孤立の原因になっていると思いますが、本当の自由とは？
- 3、現在のアメリカにおいて、多くの人が、他人と親密になることに恐怖感を持っておりませんが、人類平和のためにはどのようにするべきでしょうか？
- 4、大乘仏教では靈魂がないと説いていますが、靈魂がなければ何が輪廻転生するのでしょうか？
- 5、公案を用いないでどのような独参をするのでしょうか？
- 6、私は求めるものが有って坐禅をしておりますが、それは間違った方向でしょうか？
- 7、私は一度ガンに罹ったことがあり、子供達もいます。無常の真実を素直に受け止められません。どうすればよろしいのでしょうか？
- 8、現代社会に生きている私達は、苦を身近に感じられません。本気で坐禅修行をしたいと言うところまで自分を持っていくほど苦を感じられないのです。この事をどのようにお考えでしょうか？

これらの質問から、北アメリカ開教総監部・開教センターの今後の課題を4つ見いだすことができます。

- 1、仏教の伝統文化の無いアメリカにおける僧侶のあり方、又、僧侶を支えるべき僧伽（在家も含めた）のあり方。
- 2、西洋文化とアメリカの個人主義を踏まえた布教教化。
- 3、他の仏教宗派との混同混乱を避ける為、曹洞禅の旗幟を鮮明にする。
- 4、これは、日本でも言えることかと存じますが、身近な人生の問題に目を向けられない向けなくても生きて行ける現代社会において、どのような布教活動を進めて行くべきか。

これらは、北アメリカ開教区が抱える問題の一部にすぎませんが、この様な現状の北アメリカにおいて、開教諸師先達のご努力により蒔かれた種が、芽を出し正しい方向に育って行くには、太陽と水と良い土が必要であり太陽は追いかけて行って初めて照らされるものではなく、日本でもアメリカでもどこにいても光り輝き我々を照らして下さっている。水が高いところから低いところに流れて行く真実も、どこに行っても変わらず、味もなく色もなくされど絶対に欠かせないものである。すでに種が蒔かれた土は、よそから持って来た土と入れ替えるわけにはいかず、良い土になるよう育てていかなければいけないと言うことを、今回の巡回布教を通して、青山老師は説いてくださいました。

臘八摂心に参加して

禅宗寺坐禅会
ポリー チュウ

昨年、禅宗寺に於いて臘八摂心が開教センターと共に催されました。私は禅宗寺坐禅会より開教センターに対しまして今回の行事を後援していただき感謝いたします。また僧侶の方々や典座の方々の大変な仕事と綿密な行事計画、各地より参加された方達、そして道元禅師「自受用三昧」を用いての奥村師による思慮深い講義に感謝いたします。

私は1992年に初めて禅宗寺を訪れました。以前、私は多年に渡り、禅についての本を読んでおりましたが、実際に坐禅をする事はありませんでした。禅は私にとってあくまで知的な抽象概念だったのです。実際に日本から来た開教師や雲水さんと一諸に、坐禅を体験したあとでも、まだ不規則的に参加しただけでした。何故なら私は朝非常に早く起きることが嫌いだったのです！しかしある時点で私は、頭だけの理解から、坐禅を実践する事により体が馴れ、そして定期的に私は座り始めました。私にとって禅宗寺で、坐ることは坐禅修行と、日常生活に坐禅をすっかり溶け込ませました。しかし今回の臘八摂心は人生そのものを坐禅によって落ち着かせる可能性が開かれていました。

奥村師はある講義の中で私達に「坐禅は人生の一部ではありません。もっと正確に言えば、人生は坐禅の一部なのです」と話されました。これは私の興味を大いにそそりました。その言葉はとても素晴らしく聞こえたのですが、本当に意味することはどういうことだったのだろうか？

初めに奥村師は今回の摂心中に罪悪感を感じた事を述べました。何故なら気候が穏やかな事と、他の参加者が仕事に行く為に坐禅を中断しなければならない時に一日中座ることが出来たからです。私は密かに仕事に行くことの方が自分自身に向き合っただけで一日中座ることよりどれくらい楽なのだろうかと思いました。だが私のどこかでは摂心全て座りたいと思い、また違う部分では自分の坐蒲から立ち上がって仕事に行かなければならない事にほっとしました。摂心の終わり頃、私は丸々二日間座りましたがそれは仕事に行くことより困難でした。しかし摂心が終わった月曜日の朝仕事に戻って行ったとき、日常生活を操縦する事がいっそう突然困難になりました。どうにかして簡単にしようとして集中して考えました。かわりにそれは反対になりました。奥村師が人生は坐禅の一部で周りに他の方法はないと言われたことを思い出しました。わたしはこれをいま思い出そうと試みます。坐禅している時私達は生命の実物と向き合う状態になり始めています。私は坐禅と摂心を続けたいと望みます。私は人生が坐禅の一部ということをよりしばしば気付くでしょう。

接心—曹洞禅サンガの集い

陽光寺禅・マウンテン・センター
天心・フレッチャー

陽光寺禅・マウンテン・センターに、古くからの知己、そして新しい友人の皆様をお迎えすることができたのは素晴らしいことでした。極度に変わりやすかった天候とはうらはらに、静かで、深い坐禅を行ずることができました。雪おろすと、路上の除雪のおくおれのために、接心が始まる日、私は禅・マウンテン・センターまで帰りつくことができませんでした。真光（禅・マウンテン・センターのスタッフの1人）が救助にかけつけてくれて、まだふりしきる雪の中、帰山できたのは、午後11時頃でした。月曜日（2日目）までには、雪はずでにとけていました。これまで、雪がこんなに短時間にとけてしまったことはありませんでした。正式な接心の進行の中で、全ての人が、陽光寺のくるくる変わる風景にとけあってくれました。私達は、様々なサンガから来た人々の、環境や状況ととけあう能力に敬意を表します。道元禅師が、「乳水の如く和合せよ」と言われたように。

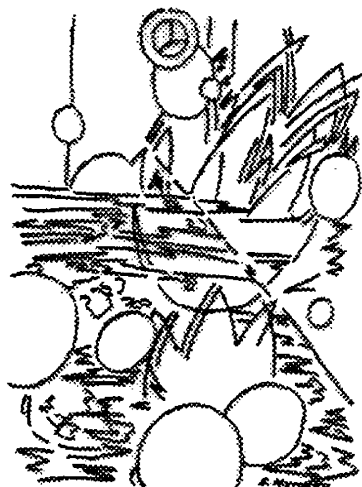
時がたつにつれて、坐禅は深くなり、法話は人々をはげましてくれました。マイケル・禅淵・ウェンガー師（サンフランシスコ・禅センター）は、「生か死か？」と題して鋭い話をされた。昔の禅話と現代の挿話をうまく交えながら、禅の修行の基本的を鮮やかに描きだして、人々の受けもよかった。アン・清泉・フレッチャーは「不知最も親なり」について話した。分かりやすい話し方でしたので、人々は評価していました。「従容録第17則」の「法眼毫釐」の話を説明し、また、道元禅師の「普勧坐禅儀」に於けるコメントを説明してくれました。道元禅師は、私達は、元来、悟りの中にあるが、これを我々は現実化しなければならないと説かれました。奥村先生の「南嶽磨磚」についての説明は、南嶽と馬祖との磨磚の公案のより深い翻訳を与えてくれました。この公案について、道元禅師は、「正法眼蔵」の中で、長い説明を書かれ、この公案の様々な面を提示して、修と証について説かれた。秋葉老師の「花開けば世界香る」は、全員に感動を与えた。秋葉老師は、6年間、何度もこのマウンテン・センターに来て下さり、いつも御支援をいただいています。英語で話されるのをきくのは素晴らしかった。老師の御努力に感謝致します。全員が、道元禅師の「身心脱落」に関する老師の（「心塵脱落」を「身心脱落」とききまちがわれたという）コメントに関心をもちました。どれ程、この言葉は、誤訳されてきたのでしょうか。その誤解は、道元禅師にとって、どれ程大切なものだったのでしょうか。道元禅師

は、只管打坐を説かれるときには、ほとんど、いつでも「身心脱落」という表現を使われた。（「只管打坐しつ、身心脱落することを得よ」）。そして、私達修行者にとつて、「身心脱落」はとても重要なことである。

天候は、雨がふって、靴の中に水がしみこんだり、樋から水がもったり、そして、しばし陽光がさしたり、という変化をくり返していました。最終日に、また雪がふりました。陽光寺にとって、今回は、はじめての正式な冬安居でした。参加者全員のひたむきな修行のおかげで、この安居を円成させることができました。また、最初の冬の首座法戦式もありました。シャロン・チレン・メーラーさんが首座をつとめました。法戦式のあいだ、また雪おろしがありました。これも陽光寺ではじめてでした。私達は、法戦式に参加した人々全員に感謝し、また首座に与えられる祝語を楽しみました。

その日（日曜日）の朝、秋葉老師は、涅槃会の法要の導師をされました。釈尊も、様々なサンガのメンバーが一堂に会して、涅槃会を勤めたことを喜ばれたことだろうと確認致します。その日、山下前開教総監が病気であることを知らされました。それから5日目に御遷化されたことを悲しく存じます。秋葉老師は、古溪先生と一緒に、山下前総監のお見舞に他の人々より早く、出発されなければなりません。私達が、いつかは直面しなければならない、生死についての日常生活の中での、もう一つの教えでもありました。

全体として、今回の接心は、力強く、そして調和的でありました。ちがったグループの人々がそれぞれの創立者の精神で、共に坐る時、私達が間違った方向に進むことは殆どないと思います。何度も、会議をもつことよりも余程容易なことであります。様々なサンガの人々の集いが継続していくことを楽しみにしています。全ての参加者、そして特に、曹洞禅・エデュケーション・センター（北アメリカ開教センター）と、禅マウンテン・センターのスタッフの人々が、この接心の準備のために、一生懸命に働いてくれたことに感謝を申し上げます。



私の『坐禅参究帖』(1)

藤田一照

アメリカ・マサチューセッツ州ヴァレー禅堂住持

《はじめに》

坐禅を始めて間もないころ、たまたま沢木興道老師の提唱録を読んでいたら、「一切経は坐禅の脚注である。」という文句に出会いました。当時の私にはその深い意味はわかりませんでした。が、「ずいぶん大胆なことを言う坊さんだなあ。」と妙にこころに残りました。のちに、道元禅師の書かれたものを読むようになり、その中に、

「おほよそ西天東地に仏法つたわるるといふはかならず坐仏のつたわるるなり。」

「仏法つたわれざるには坐禅つたわれず、嫡々相承せるはこの坐禅の宗旨のみなり。」

「仏祖の道はただ坐禅のみなり。」といった「仏道＝坐禅」ときっぱり言い切っている言葉があちらこちらにあるのを見て、「はあ、沢木老師はこの辺の消息をご自分の言葉で言い換えられたのだな。」と合点がいったのでした。

道元禅師や沢木老師は一生を通じてみずから坐禅を専一に行ぜられ、それを人にもあまねく勤めてやまなかった「筋金入りの坐禅人」でした。それにしても兩人によってここまではっきり「正伝の正法は唯だ打坐のみ」と断言・高揚されている坐禅（只管打坐）とはいったいどんな代物（しろもの）なのでしょう。坐禅のどこにそんなに「途方もない」ことが秘められているのでしょうか。

私は、この道の先達の方々から、直接・間接にいろいろ教えていただきながら、自分で実際に坐禅を行じる一方で、「自由気ままに、いろんな角度から、この坐禅の正体にせまってみよう」と思い、おのれの気のむくままに、自分勝手なことをあれこれと考えてきました。いまでは、直接に仏教や禅に関わらないような分野の本を読んでも、話を聞いても、それがいつも坐禅をめぐる問題になんとかつながってくるような回路が、自分の頭の中に知らないうちにできています。「広学博覧はかなふべからざる事なり。一向に思ひ切つて、留まるべし。」（『正法眼蔵随聞記』）と論された道元禅師からは、きっとお叱りをうけるでしょうが、坐禅を軸にした「広く、浅く」のこういう雑学・

雑考が、正直言って、私はとても面白いし楽しくてしょうがないのです。私は、それらを坐禅についての体系的考察などにまとめあげる気など毛頭ありませんし、もとよりその力もありません。ただ折にふれて考えたり思いついたこと、調べたことなどを、メモ風にノートに記して自分の『坐禅参究帖』とし、時々見直したりして、一人で遊んでいるだけです。

今回、『法眼』への寄稿のお誘いを受けましたので、この『坐禅参究帖』の中に雑多に散らばっている文字通りの「断想（折りにふれて浮かんだ断片的な思い）」に手を入れ、敷衍して、人にも理解できるような形にして紹介してみてもどうかと思い立ちました。『法眼』の読者の中には、長年にわたって坐禅を行じ、深い理解に達しておられる方がきっとおられるはずで、そういう方々に、私のつたない文章を容赦なく点検・批評してもらい、ご教示をいただければ、この上なく貴重な、さらさる参究の糧となるだろうという虫のいい願いが、その理由の一つです。

もう一つ、これははなはだ僭越なことですが、私の断想の一片でもいいから、それがすでに坐禅に関わっている人達の修行にとって良い刺激になったり、まだ坐禅にふれておられない人達を坐蒲の上へといざなう機縁になったりして、ささやかでも坐禅を広める役に立てばという思いもありました。

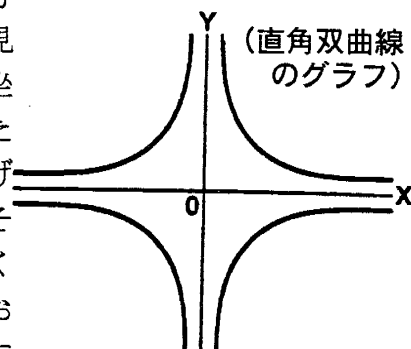
こういう抱負をもって、これから坐禅をめぐる取り留めのない私の断想を書いていきます。読者の方々から、質問・批判・感想などなんらかのフィードバックがあれば、それにも反応していきたいと思えます。どうぞ遠慮なく、『法眼』かあるいは直接私までお便りを下さい。

《断想 1》坐禅の魅力

私は全くの偶然というか、ものはずみとでもいうか、自分でも思いがけない仕方で坐禅に出会い、それ以来約十五年いわば坐禅に首根っこをつかまれたような形でその世界をうろうろしながら今に至っている。自分でそれを行じたり、人にすすめ、教えたりしているにもかかわらず、いまだに不思議な思いで「坐禅とはいったいなんだろう？」という問いをくりかえしている。

自分の人生にとって、坐禅が、どうしてもなくてはならない、ぬきさしならないものだということは、ほとんど直観的確信となっているのだが、その当の坐禅

の正体はいまもって未透の「公案」として自分の中にある。自分の見解（けんげ）をもって坐禅に向かって参ずるたびに「まだまだ堀下げが足りないぞ！」と、それがさしもどされてくる。その繰り返しだ。おそらく、永遠に透過することなどないのかもしれない。ちょうど反比例のグラフ（直角双曲線のグラフ）で、その曲線がX軸（ $Y=0$ ）、Y軸（ $X=0$ ）に限りなく近づいていくにもかかわらず決してそれを通過しえないように、0（非思量、無分別）としての坐禅には、有（正、負の数）の延長、つまり思量分別では決して参入できないようになっているのだろうか。



ところが当の坐禅の実際はといえば、きわめて簡單明瞭・單純透明なもので、どこにも複雑怪奇・曖昧模糊としたところはない。ただ作法に則って壁に向かい、正しい姿勢で坐りさえすれば、それだけで即座に誰にでも実現できることなのだ。

「いわゆる坐禅は静かなる処に薄団一枚を案じ、その上に端身正座して、身になすことなく、口にいふことなく、意（こころ）に善悪をはからず、唯しずかに坐して壁に面（むか）ひ、坐して日を送る。この外に何の奇特玄妙の道理なし。」（『大智禪師法語』）

坐禅とは掛け値なしにただそれだけのことでそれ以上でもそれ以下でもない。しかし、それを身をもって行ずれば行ずるほど、そこに無限の深さがあってどうしても底に手が届かないといった感慨がしみじみと湧いてくるのだ。坐禅はあたかも、どこまでもはつきりと晴れ渡っているがゆえに、かえってどこまでいっても果てを見とどけることができない、奥深く澄みきった青空のようだ。沢木老師はそれを「幽邃（ゆうすい）」と表現されたのだった。坐るだけというこのうえなく單純素朴な行い（おこない）によって、いまここに実現できることなのに、それを言葉や思いでつかまえようとしたら無限の彼方にあるようにみえるという不思議なありよう、性質が坐禅にはある。私にとって、坐禅のもつ魅力はそこから発してきているように感じられる。

《断想 2》 坐禅からのいざない

形そのものは単純で何の変哲もないのに、そのなかに無限の広がりや幽邃さをたたえている「坐禅」。仏法のすべてがそこに収斂し凝集しているといわれる「打坐」。そんな深い道理もなにも全く知らないで、教えられるままに禅寺の接心に参加し、初めて坐禅を組んでみた。すると、「やっとここへ帰ってきたか。ずいぶん待っていたぞ。これからはこの坐禅という一行を日常生活の真っ只中に持ち込んで、そこにクサビのように深く打ち込んでいけ。そうしたらどういふ人生がひらけるのか、お前の一生を材料にして、そういう実験をやってみろ。」という声は自分の内に聞こえてきた。(実際には、そういう音声は耳に聞こえてきたのではないから「声」というのは語弊がある。むしろ「思念」といったほうが適切なのだろうか、自分の好みでここでは「声」と表現する。)それはきわめてかすかだったが、無視することのできない確かさと、ある力強さをもっていた。その時の私の坐禅は「坐禅」などと呼べたものではなく、睡魔・妄想・退屈・痛みとの格闘にあけくれている、まことに粗末な状態だった。「こんなことやって何になるんだ。時間の無駄じゃないのか。はやくやめて帰ってしまおう。」というのが頭のなかを占めていた思いだった。にもかかわらず、そういう思いとは全く別な次元で、私のどこかが「坐禅」に触れていたのだろうか、その接点とおぼしきところから、「坐禅」からのいざない・呼び声が聞こえてくるのだった。そしてそこから、不思議な安らぎのようなものが湧いてくるのが感じられるのだ。私はうろたえた。「一体何が起こっているんだ!？」

『維摩経』のなかに「火中の蓮=燃える火の中に蓮花の花が咲く」という文句がある。普通ではあり得ない希有のことをさすのに使われるたとえだ。もがきにもがいて、きりきり舞っている火のような自分のなかに、思いもかけず聞こえてきた、坐禅からの静かないざないの声は、私にとってはまさに「火中の蓮」だった。私は結局それに導かれて人生の方向を大きく転換をしてしまったのだった。

あのいざないの声はどこから私の意識へとどいてきたのだろうか? その場所は、私の意識からは見つけることのできない無限の遠方でありながら、同時にそれは常に私という存在の脚下でもある(無限に遠くかつ無限に近い)不可思議の地点にあるとしかいいようがない。あの時坐禅をしたことで、私は期せずしてそこ

から発してくる呼びかけに触れたのだろうか。その声は、実はずっと昔から私に向かって「帰っておいで。ここがお前の帰り着くべき場所だよ。」と呼び続けていたのではなかろうか。

「すべて勞する者、重荷を負う者、われに來たれ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心ひくければ、我が軛(くびき)を負ひて我に學べ、さらば靈魂(たましい)に休息(やすみ)を得ん・・・」(マタイ傳11の28・29)

坐禅、またの名を『歸家穩坐』。

《断想 3》 坐禅とその脚注

沢木興道老師は、

「坐禅は口で言えぬことをするのであり、思いで思えぬことを行ずるのだ」と言われた。コトバや思いでは永遠に至りつけない法(ダルマ)が、身と心を文句なしに事実として坐禅に投げ入れる時、摩訶不思議なことに、なんの造作もなくちゃんとそこに現前するということだ。あれこれアタマで詮索するのは無用・無駄。だから古来、禅門では「つべこべ言わずに、まあ坐ってみろ。」というのが常套文句になってきたのだ。「坐ったらそれでおしまい。」人間のこざかしさなど最初から全く相手にされていないところが、まことに痛快だ。

しかし、アタマを持って生きているナマミの人間が坐禅を性格に行ずる上では、「口で言えぬこと、思いで思えぬことをする坐禅」の実態をより鮮明に浮き彫りにするために、あえて知性をフルに働かせて、どこまでもしつこく肉薄していく努力もまた大切なことではないか。

「一切経は坐禅の脚注だ」というのはそれがそうした坐禅への先人達への肉薄の努力の跡だということだ。言葉にならぬ坐禅の実物と、それを承知の上で、どこまで言葉で的確に描きだせるかという限界に挑む表現者との緊張関係から、数々の珠玉の言葉が生み出されてきたのだ。決して交わりはしないのに、双曲線はX軸、Y軸に無限に接近していく、その0と有の線のはざまに生まれる緊張感抜きには、あの美しい形が成り立たないように。

それらは坐禅そのものにとってみればあらずもがなのことかもしれない。そんな「脚注」なしでも坐禅という「本文」はそれだけでちゃんと意味を持って独立しているからだ。そてに対して、「本文」抜きの「脚

注」など大して意味はない。(達摩大師が中国へ来たのはそれまで脚注しかなかったところへ本文を持ってきたのだといえないか。)しかし実際問題としては、本文としての坐禅が正しく読まれる(行ぜられる)ためにはすぐれた脚注が必要なのだ。少なくとも、私の場合は、先人の残してくれた脚注がなかったら、いまごろはおそらく自分の勝手放題な本文解釈をやらかし、とんでもない坐禅をやっていたに違いない。本文=行と脚注=解が相応・一致を求めてダイナミックに刺激しあいながら深まっていくのが本当のありようだろう。

坐禅そのものが、過去に作られた一切経で満足しているはずがない。坐禅という本文は、いつも、〈今〉という時代の光のもとで、新しい脚注によって新たに読みなおされることを求めているのだ。この現代社会の中であって坐禅を行ずる者は、坐禅から「お前独自の一句をもちきたれ！」という要請を受けているのだ。

《断層 4》坐禅と瞑想

「坐禅というのは、精神統一によって、無念無想の境地になることだ。」と。単純に考えている人が多いのではないだろうか。しかし、そこには、ある操作や手段・技法を使い、「こころ」を、特定の状態に変えることを目的とする、いわゆる「瞑想 Meditation」との雑同があると思う。坐禅が"ZEN MEDITATION"、あるいは"SITTING MEDITATION"と翻訳されている欧米では、特にその傾向が強い。心理療法家や医者が、有効な「こころ」の治療法として、東洋的瞑想法の応用を試みて、それなりの成果をあげていることが報告されている。そうしたことを背景として、心身の健康・能力の開発・こころの平安・諸々の人生問題の解決などさまざまな目的実現のための各種各様の「瞑想法」が昨今、花盛りだ。そして、坐禅もその中の一つの行法として喧伝されていることが多い。

たしかに仏教の伝統のなかには、この意味での瞑想と呼ぶにふさわしい修行法がたくさんある。長い伝統に裏付けられた、さまざまな「こころ」の問題に対する深い洞察と有効な対処法を、そこから学び、引き出して現代に積極的に生かすという作業は今後、おおいにすすめていくべきだと思う。

しかし、坐禅がこうした文脈のなかだけでとらえられるならば、坐禅本来の姿が矮小化、特殊化され、その本質が見失われることにつながるだろう。坐禅、と

りわけ道元禅師の教えられた只管打坐は、こうした「瞑想」というカテゴリーでくくることのできない質を持っているからだ。結論的にいって、坐禅はいわゆる瞑想とは違うと私は考える。ではどこが違うのか？

西洋・東洋起源の多種多様な瞑想行法と坐禅を並べてみた時に浮かび上がってくる、坐禅の独自性とその意義。私にとっては、それが坐禅参究の大きなテーマの一つだ。

《断想 5》坐禅と瞑想における「結跏趺坐」の違い

道元禅師は坐禅のことを、「結跏趺坐」とか「正身端坐」、「打坐」、「兀坐」(兀は秃山のことで、坐禅の不動の貌を表す)と呼んで、端的に「坐る」という「からだ」の具体的形でもって表現することが多い。これは偶然のことではないだろう。道元禅師の坐禅観においては、坐禅の眼目が、自分に覚知のできる精神の状態にではなく、なによりもまず、その生身のからだの全体的形=姿勢、つまり坐相にあったのではないだろうか。

坐禅においても、他の瞑想法においても、いわゆる「結跏趺坐」が最善の坐法とされている。しかし、その位置づけにおおきな違いがあるように思われる。

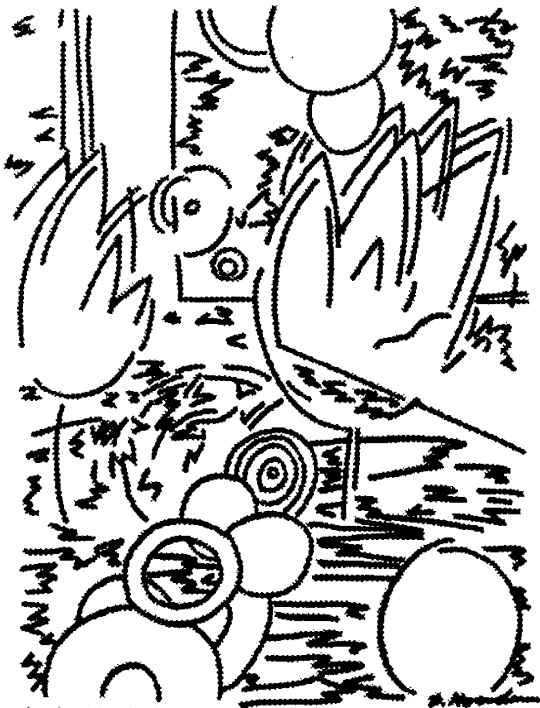
瞑想行では、結跏趺坐して、それからあらためて、特定の瞑想法を始める。つまり結跏趺坐プラス瞑想ということだ。そこでは結跏趺坐はあくまでも、瞑想という心的作業のために最適な心身の状態をつくり出す便法なのであり、手段であって目的ではない。坐ること(身)は容器であり、瞑想すること(心)がその中身であるというふうな、二次的な構成の行になっているといえるだろう。そして、重点が置かれているのは、あくまでも精神的作業である瞑想の方だ。

一方、坐禅のねらいは、正しく結跏趺坐することそのものであって、それにあとから追加しなくてはならないような作業がなにもない。つまり結跏趺坐プラスゼロ。(沢木興道老師の名言「坐禅する。それでおしまい。」)そこには「からだがり、もう一方で、こころがそれとは別の何か(たとえば、聖なる言葉をこころのなかで唱えたり、聖なるイメージを思い浮かべたり、ある思念や感覚に精神を集中したり、呼吸を数えたりといった、さまざまな観念観法の方法)をする」という二元性がないのだ。坐るという営みに、からだだけでなくこころも同時に使い尽くされている。言い換えれば、心身が一如となって坐禅だけをしているの

だ。(『正法眼蔵』三味王三味の巻にある、「結跏趺坐は直身なり、直心なり、直身なり・・・」とか、「身の結跏趺坐すべし、心の結跏趺坐すべし。心身脱落の結跏趺坐すべし。」という表現が参考になる。)

同じ結跏趺坐といっても、「瞑想」をしている人の姿勢と、「坐禅」をしている人の姿勢とを見比べてみると、かなり違っている。眼を閉じているか開いているか、両手をどういうふうに保っているか、など細かい点の違いもさることながら、からだ全体の形から受ける微妙な印象が違うのだ。前者の姿勢には、当然のことながら、内面で精神的仕事に従事しているということが形に現れている。高名な瞑想家と言われる人でも、日本の坐禅道場でならきと直されるような結跏趺坐の姿勢で坐っていることが多い。これは彼らが間違っているというのではない。優劣といった価値判断の問題ではなく、両者が質的に違った営みだということなのだ。

(この文は「私の坐禅参究帖」と題して「大法輪」に平成9年2月号から11月号まで連載したものを基にしています。)



古木に新芽をつぎ木する

ミルウォーキー センター伝道師
サラ オコーナー 洞然

日本やカリフォルニア州にある開教センターから遠く離れてアメリカ中西部に住む伝道師の私に、「法眼」創刊号の感想を書いて下さいと頼まれた時は驚きました。

「法眼」が発行されて、日本曹洞禅とアメリカ曹洞禅の関係について、お互いの心を開き真剣な対話が進んで行われている事に感謝いたします。私達には率直な意見交換をする場所が必要です。理解が評判や噂などの範囲内に限られている様な立場の者からすると、「法眼」を手にする事は自分が持っている問題を理解する助けとなります。

私達は伝統と革新、日本文化とアメリカ文化、組織的な階級制度と個人の独立、などの間の緊張関係をめぐって困難な問題を解きほぐそうと努力している様に思われます。このもつれた問題の中に潜んでいるのは、我々仏道に従う者にとってはお馴染みであるはずの「エゴの権力への渴仰」という根本問題です。多くの寄稿者によって表現されている事の大部分は本当の所「誰が責任者(主人公)なのか?」と言う事への暗黙の問い掛けです。

少し話が逸れますが今年の夏に聖護寺で行われた国際安居中に私が経験した事について述べさせていただきます。そこでは日本人の指導者と担当の人達が、10週間という短い期間で世界中からの参加者に、伝統的な曹洞宗の法式と修行の全体についての理解を得て貰う為に苦心されました。その結果は無数のそして時には苦痛をつのらせる様な、多数の細かい事に専念し没頭しなければならぬという事でした。その様な状況の中で溺れずに生き残るには、夢中になって泳ぐ様にひたすら自己を手放すしかありませんでした。

奥村師は講師として参加して居り、ある夜安居者の為の話し合いに出席されました。私は奥村師の存在に勇気づけられ「伝統の機能とは何ですか」と質問しました。

「伝統はとても深い根を持つ樹齢を重ねた大木の様なものです。時には殆ど死にかけている様に見える事もありますが、幸運にも新しい生命に満ちたひこばえが出て来る事もあります」と答えられました。私はその通りだと思いました。新しい芽を古い木に接ぎ木するのは色々な国からやってきた私達次第なのです。もし慌てふためき古い木と関係のない孤立した場所に種を蒔いたとしたら、新芽は育つかも知れませんが強くはならないでしょう。

私が上の話を書いたのは「法眼」の創刊号が成長と変容のジレンマを認めている様に感じたからです。問題は私達が成長する事は分裂する事なのだ、と定義するかどうかという事です。(アメリカ禅が成長するという事は、日本の禅から分離する事なのかという事です) もしも私達が同じ目的を持っているなら互いの相違を認め合う事は容易です。しかし多くの記事の主旨を読んで、果たして私達が本当に目的を共有しているのかどうか、また組織的なあるいは個人的なエゴに基づいたポーズをとっているだけではないのかという疑問が出てきます。

曹洞宗の責任ある人達からの挨拶文はアメリカ人と有意義な協力関係を望んでいることを明確に表しています。しかし「開教」(プロパゲーション)という言葉が頻繁に使用しており、それは公式の曹洞禅としての統制をほのめかしているようにも感じられます。

ワイツマン宗純師は「嗣法を終えた人」を集める為、曹洞禅仏教徒協会(伝道教師が中心になって設立したアメリカ人指導者の協会)の法人化について書いています。宗純師は「我々は1つのグループとして開教センターとの関係をはっきりさせることが出来ると思います」と言っています。

アメリカ曹洞禅の、本当の足掛かりになると私が信じるのは次の事です。現在日本の道場で修行した人々(開教師)とアメリカで修行した人々(伝道教師)とそれぞれ違ったタイトルを与えられています。ここに明確な階級差違があります。これははっきりとした問題です。これら2つ(開教師と伝道教師)のタイトルが廃止され、そして仏教の歴史と教義の知識と、日本とアメリカとの両方の伝統の中での真実の経験をもった、全ての人々を対象にした、曹洞禅の教師としての認定制度を確立出来る新しい修行のプログラムを創出する事が最も望ましいと思います。

最後に私達の最も重要な目的を明確にしていきたいと思えます。これが自己を主張する事だとは思いません。むしろアメリカに於ける曹洞禅の修行と道元禅師の教えを更に深める事が、今真剣に取り組むべき目的だと思います。それが唯一の修行と仏法を広める為の無理のない努力で、それは我々の相違を克服し本当の協力関係を可能にする事でしょう。

終わりに「法眼」創刊号から私の好きな部分を引用します。最初は奥村師の現成公案の講義から「私達はどの様に共同体全体を正しい方向に導いていけるか考えなければなりません。そしてそれぞれの個人的な責任において行動が行わなければならないでしょう。私達は完全に独立した一人の人と同時に私達は共同体の一部です。1つの行動でどの様に両方を現成させることが出来るのでしょうか?それは本当に私達の人生の基本です」

もう一つはワイツマン宗純師からの意見で「お互いに胸

襟を開き率直である事によって、またどの面にも影が出来ないように光を十方に輝かせることによって、我々はその信頼関係を確立出来ることを願っております。こうすることによって功德は遮られることなく両側に流れ出ることでしょう。」

私は「法眼」が発行された事に感謝しており、色々な内容を楽しましました。特に現成公案の講義が含まれていることに満足しており、この連載が続いていく事を願っております。また、曹洞禅を慕う様々な多くの人達に幅広い話し合いの場を「法眼」が提供する事を望みます。

「日本からの便り」

宗 清志
福井市天龍寺副住職

柳梅風眠、新開地「北米開教センター」にて、愈々弁道御向上のご様子、手許に届いた「法眼」を読み返しながら、スタッフの面々を思い浮かべて頂いてます。

人間の思慮を超えて醸し出された言葉・文字は妙言・妙語となって、人間の魂を揺さぶる時があります。それは、聞く度に、読み返す度に新たな確固たる信念を深く深く掘り下げさせてくれます。何年も何年も時間を掛けて真自己中に内容が熟成されてまいります。経験、価値感の違い、民族思想の変遷をも超えて“人間の存在”を教示し続けます。

つまり、野僧は「法眼」誌の内容充実、発行部数増加を願って止まないのです。此誌は現今、必要不可欠な書面機関誌になります。奥村所長老師はじめ、弁道力厚く、優れたメンバーが揃っている今だからこそ、其地の長期的障害、苦悩を共にしながらでも、続刊して下さい。海外開教師の苦悩(故人は皆な短命です。)を垣間観ただけに過ぎない拙僧でも、あの日常底での発刊は、大変なご苦勞な事と痛感します。

しかし、あの沢山の純粋で熱心な“求道者”達の為、発心の糸口を紡ぎ出し続けて下さい。

- P. S. この春、皆様に再会と参禅したく、渡米準備致しております。

「開教ニュース」

訃報

前北アメリカ開教総監、両大本山別院禪宗寺開教師、故山下顕光老師には、去る2月20日カリフォルニア州アルタデーナのご自宅にて、世寿88歳をもってご遷化されました。老師の北アメリカにおける長年のご功績に深く感謝し、謹んで哀悼の意を表します。なお、3月1日に本葬儀が、曹洞宗管長専吏である曹洞宗宗務庁の洞外文隆教化部長の秉炬により厳粛に修行されました。

訃報

グラスマン徹玄伝道教師の婦人、サンドラ・ホルメス先生が、去る3月21日ニューメキシコ州サンタフェにて心臓発作のため、世寿56歳でお亡くなりになりました。

ご生前、仏教を通しての社会活動に貢献されましたことに、深く感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

入山式

去る3月8日、サンフランシスコの桑港寺において、南原一貫北アメリカ開教師の入山式が盛大に執り行われました。桑港寺における、南原師の今後の活躍が期待されます。

海外徒弟研修会

3月25日、愛知県第1宗務所海外徒弟研修の一環として加藤研吾所長率いる徒弟の皆さんが(小学校1年～高校生)、両大本山別院禪宗寺・開教総監部・開教センターに拝登され、開教の現場を見学して頂きました。一行は翌日、陽光寺禅マウンテンセンター(標高2千メートル)に拝登され一泊研修が行われました。禅マウンテンセンター堂頭フレッチャー天心師の感想は、「天候が悪かった為、研修中、山に雲が掛かっていたのが残念・・・

坐禅の時、数年間修行を積んできた人のように皆さん良く坐られていたので驚きました。・・・違った文化で育った子供達との交流は大変勉強になります。今後もこのような活動を続けて下さいますことを願っております。」と仰ることでした。研修に参加した徒弟の皆さんも、のびのびとした新しい仏教の雰囲気を感じて頂けたことと存じます。その後一行はアメリカの文化に触れ、29日帰国の途につかれました。

「北アメリカ開教センター行持日程」1998年4月～10月

宗典講読会	4/12, 5/24, 7/19, 9/13, 10/25. 午前10時30分より、両大本山別院禪宗寺において、奥村正博開教センター所長による正法眼蔵現成公案提唱。
仏教講演会	5/16 ペンシルバニア州平等山禅堂 講師：ベナー・ジュ大円 7/12 カリフォルニア州ロングビーチ仏教会 講師：横山泰賢 8/1 カリフォルニア州モントレーベイ禅センター 講師：奥村正博 9/26~27 カリフォルニア州シャスタ・アベイ 講師：ベナー・ジュ大円 10/11 カリフォルニア州ロサンゼルス禅センター 講師：奥村正博
曹洞禅連絡会議	6/1~3 サンフランシスコ禅センター
曹洞禅サンガの集い(摂心)	6/5~12 ミネソタ州宝鏡寺 10/15~21 タサハラ禅マウンテンセンター